

日出彦の歳時私記

北京編(上)

1. 北京空港(1)

久しぶりに北京の地を踏みました。前回は2002年にIEC(国際電気標準化会議)の北京総会に出席して以来ですから、5年ぶりになります。今回は中国国内で開催している第7回ICRMS2007(信頼性・保全性・安全性国際会議)に出席のためです。日本からは5名の参加で、米国、英国、オランダ、スウェーデン、フィリピン、シンガポール、ブラジルなどからも来ていましたが、95%は中国人です。専門的な話はこの位にして、北京の状況を報告します。北京市といっても、今回はかなり郊外で、天安門から車で1時間半はかかるというところでの開催です。東京でいえば八王子や町田のような感覚でしょうか。

北京空港は5年前よりもさらに近代化というか国際化されていて、日本の空港と遜色ありません。入国審査も簡単で荷物もスムーズに出てきて、かつて仕事で何度も通った1980年代とは隔世の感がありますが、当時の極めて中国的な建物も味があってよかったのにと回顧した次第です。(実は出国時は大変だったのですが・・・)

2. 九華山庄

会議の開催場所兼宿泊地は北京九華山庄(Jiu Hua Spa & Resort)といい、空港からはタクシーで50分ほどかかります。九華山荘(多分日本字ではこう書くと思います)は八王子などよりも、石和温泉と考えた方がよいかも知れません。畑地(周りは粟やとうもろこしの畑)に温泉が湧いて保養地が生まれたい北京昌平小湯山という温泉郷の一郭です。広大な敷地ですが、なおまだ建設中です。山庄内は主要な建物をモノレールが巡回していて、点在する建物に歩かずに行けるようになっています。

2.1 モノレール

モノレールは小火車といい、6つの駅を循環運行します。駅は建物の2階に隣接していて、降りるとそのまま各施設に接近できます。空港からのタクシーの運転手に(多分気を利かせて)一般の保養客が泊まる地区で降ろされたため、ボーイさんに宿泊地までこのモノレールを使って案内して貰いました。車内は3人掛け向かい合わせの席が3列あり、つまり18人乗りで、およそ幅2m、高さ2m、長さ5mほどの細長い車両です。これが3両連結で運転されています。地上から見上げると、今にも横倒しになって落下しそうなあやうさです。そのために、スピードは芋虫並みで進みます。赤、白、黄、青の車両があり、常時は3台がほぼ等間隔で運転されていました。宿泊客や温泉客は自由に乗降できます。小生は山庄内の地形把握のため2回りしてみました。1回り20分ほどで、各駅に駅長さん(といっても一人ですが)の従業員がいて、モノレールが来るまでプラットフォームに乗客が入らないよう安全監視しています。

2.2 十六区国際会議所

宿泊したところは会議の開催場所でもあり、国際会議所とも呼ばれている16区でした。12階建ての大きな建物です。3年前もアジア品質管理会議が開催されたそうですが、それに参加された知り合いの教授によると、そのときはまだ16区はなかったそうで、従ってモノレールもなかったそうです。それまで15区が国際会議所で、16区はまだできて間もないそうで、従業員も見習いの名札の人がかなりいます。近代的なビルの会議所ですが、玄関や屋上には中国風の屋根瓦付の装飾が施されていて、日本では味わえない感覚です。泊まった部屋は禁煙シングルで、8階の部屋でした。口の字型の建物の外側に面した部屋で、モノレールと工事中の建物らしきものが見晴らせます。



温泉行宮のある五大殿の停車場にモノレールが入ってきたところです。背景に見えるビルは 15 区で、16 区も双子のような白い建物です。これらは会議場と客室になっていて、特に 16 区はできて間もないためか盛況でした。それぞれ地下に温泉やサウナのような施設があって、大衆的な温泉行宮より高級感があります。手前の柳や中国風の建物の前は池で入れませんが、その前にチラッと見える回廊の前が大浴場になっています。

ご覧のように細いモノレールは這うように建物を巡って行くのです。

室内のダブルベッドは大きく（3 人分くらいの幅で）立派です。備え付けのパソコンもあり、インターネットにも繋げるようになっていますが、中文で出てきます。持参のノート PC に LAN ケーブルを繋ぎ直したら、和文で使えるようになりましたが、なぜか回線速度が低くて動画飛んでしまいみるのは無理でした。なぜか Outlook Express では Biglobe メールが読めませんでした。nifty は大丈夫だったのですが、なぜでしょうか？ Web メールでは Biglobe メールも読めたので仕事に問題はなかったのですが。

また日本でもオフィス等に設置してある冷水とお湯の給水器が部屋に備え付けられていたのはよかったですね。会議では会期中毎日 3 食分の食券（物価の高い日本では考えられない！）が配布され、1 階の大宴会場でビュッフェ形式の食事をしました。北京風と四川風の中華料理が中心でしたが、若干の洋食も用意されていました。昼食と夕食には必ずスイカが出て食べ放題、目下北京はスイカの時期であることを思い出しました。いまから 15 年ほど前、国営工場と技術移転の交渉をしていたとき、夏場に工場に入ると、入り口にスイカが山盛りにおいてあったのを思い出しました。もちろん、そのときも 10 時と 3 時のおやつはスイカ、スイカでした。



これは国際会議の全体セッションが開かれた大広間で、壇上のディスプレイは今回の幹事を務める航天部（これは日本の JAXA、宇宙航空開発機構に相当しますが、格は「省」です。）の象徴のロケットが描かれています。昨年、神舟 6 号という宇宙船実験機の回収に成功して、目下意気軒高な部といえます。前方は来賓席で、中国の要人と外国人の席になっていました。机上の湯呑みはジャスミン茶が入っていて、ときどきホテルの従業員が湯を継いで回ります。

2.3 温泉行宮

ここの成立はスパと保養が最初で、山荘入り口の正面にある五大殿という建物に受付があり、温泉やプールのある「温泉行宮」に入場できます。1 日入り放題の最安の券を購入して利用してみました。ロッカーは電子錠になっていて日本のスパよりも安全ですが、鍵の補償代に予め 100 元（1650 円）払う必要があります。ちなみに、1 日券は 82 元（1350 円）でプール、各種温泉、サウナが使える、牛乳風呂か塩水風呂がオプションで使えます。もう 10 元（165 円）高い券だと全体のサービスも付きます。時間は 8 時から夜中の 2 時まで入り放題です。水着着用でプールも温泉も露天で男女共用です。プールは真水で冷たいので、

小生はもっぱら温泉に入りましたが、ぬるめです。子供たちがはしゃいでいましたが、遊ぶのにはよい温度です。正面の最大の浴場は8匹ほどの龍の口から出る「打たせ湯」があります。ちなみに、まったくの露天なので、(多分)夜間照明で集まったと思われる昆虫の死骸(甲虫類が多いが、トンボもいました!)が浮いていたり、木の葉が浮いていたりします。(係員がときどき掃除していましたが・・・)



五大殿のモノレール駅からプールのある広場、温泉行宮の中心部を俯瞰したところです。背景の建物は康楽宮で温泉客が食事をし、宿泊することができます。プール脇の4本柱の東屋風は個別の浴場で5~6人は入れます。バブル泉になっています。右手の竜が並んでいる池は時折水が口から吐き出されていますが、中に入る人はおりません。左手の文字が書いてある岩山からは滝が落ちていて、打たれることができます。滝に打たれて湯に入るという繰り返しができます。プールの先の青い屋根の場所はスナックです。

プールの両側には日本の家族風呂程度の温泉が8箇所とプールを囲む形の池の淵に10箇所あり、ご婦人方や子供連れに人気があるようです。池の淵の温泉は象、熊、ライオンなどの口から温泉が出ているので、子供向きです。亀の上に乗る子供を多く見受けました。大浴場の湯はほぼ透明ですが、小浴場は不透明で濁っていたので、カラスの魚薄い程度で敬遠しました。

さらに、池の奥には医王院という病院と散策用の小道があり、途中に塀で覆われた個室の温泉が3箇所、有料の個室が3箇所位あります。しかし、こちらはほとんど利用者がいなくて、湯も透明でしたので、ゆっくり一箇所ずつ入ってみました。これらはさらにまだ増設工事中です。

五大殿の向かい側、プールの先には道一つ隔てて康楽宮が建っていて、宿泊や食事が出来るようです。その建物の裏は離れの宿泊宿になっていて、各室に専用の浴場が付属しています。そこの中心に日本の大浴場級の円形温泉があって、コテージの宿泊客の共用になっているようです。ここまでは外来の浴客は来ないため、また宿泊客は少ないため、この時期穴場です。その奥にはショッピングセンターがあります。



手前の大温泉場とその先のプール



横から見たプール、岩山に「九華分秀」?の文字

さて、プール脇の池の辺にトルコ風サウナがありましたが、日本と比べて温度が低く、いつまでもいられます。でも、使う人がいません。小生が入っている間、30分位誰も来ませんでした。日本のサウナでは、必ずヌシ的な人がいて、しかるべき場所に胡坐をかいています。1分位で出ようものならジロリと睨まれ

る雰囲気、サウナは我慢比べの感があるのですが、やっぱり中国ではずいぶん違います。まあ、外へ出れば暑い日差しの夏でしたから、いまは使わないのかも知れませんが・・・。



竜の打たせ湯



大浴場の手摺の子獅子



人の背よりも大きな茶器が・・・



康楽宮前にはいろいろな動物や立像が。工事中だが噴水にするらしい



工事中の温泉卵の店入口



温泉行宮の近くには人間ドックや医師のいる温泉医療の場所もあります。この写真は手前の建物が温泉医療の国医院ということで、問診してくれるようです。

館内テレビで見ると、人間ドックはMRIなども備わっている立派な施設の様です。

これも館内テレビや廊下の写真の知識ですが、冬の温泉行宮が売りのように、雪景色の温泉写真が見られます。北京は実体験でマイナス15℃位になるので、温泉に行くのは極楽、極楽という感じだと思います。15年前にあれば、毎週行ったに違いありません。

3. 頤和園

顔見知りの教授とその研究室の助教の中国人女性、Luさんが会議に来ていましたので、通訳を兼ねてもらい、半日市内の見学に行きました。会議の初日に、小生とLuさんとで1つのセッションの司会を務めましたが、決められた時間帯にどんどん飛び込みの発表を事務局から要請されてくるので参りました。結局、全部消化できずに終わりましたが、日本と違い発表を欠席する人もかなりいるので、それを考慮に入れても3時間分の発表を2時間に押し込むのですから、超数学的でした。このときはさらに北京風邪を引いてしまい、熱が出てめまいがして、吐き気もするという体調で散々でした。Luさんは日英中に堪能の才媛で司会を助けてもらいました。

さて、タクシーをチャーターして、最初は頤和園に向かいました。実に5年ぶりでしたが、回廊の絵画が一部補修されているようなのを除き、あまり変わっていませんでした。石舟のあるところは目下工事中で、そこまで池めぐりを引き返しました。池を掘った土で作ったといわれる万寿山は、今回は時間の関係で見上げるだけにし登るのを止めました。とにかく、観光客がいっぱい、ほとんどは現地の人ですが、それに混じってガイドさんの説明で日本語、英語、フランス語、ハングル語などが耳に入ってきます。日差しは暑いし、二人とも前に来たことがあるところなので、早々に退散しました。（なお、下記の写真は小生が操作を誤って接写モードにしていたため、ピンボケになってしまいました。意図的ではありません。）



万寿山への入口の門前



境内にある青銅の龍



池を背景にした案内のLuさん

4. 王府井通り

次に向かったのはオリンピック会場で、といっても高台からの遠望ですが、箆のようなデザインの建物が浮かんでいました。そろそろ帰宅時のラッシュアワーで、天安門前の大通りは車で混み合い始めていました。ちょうど天安門前広場では、夕べの国旗を降ろす儀式を見ようと実に沢山の人が集まっていました。大通りの渋滞が始まりかけているので、車窓から見るだけに止め、近くの王府井大通りで買い物と散策をすることにしました。かつては狭い通りで人がぶつかり加減ですれ違い、歩きながら唾を吐く人がいるので巧みに予知して避けながら歩いたものでしたが、今は区画整理されて幅広い大通りに変わっていました。デパートや高級装飾店が道の両側に立ち並び、パリ風の路上のカフェが並び、日本と変わらない服装の若者がカップルやグループで歩いています。もちろん、日本人や欧米人の観光客もおりますが、ほとんどは中国の若者です。



王府井大通り3景: 道の両側には百貨店や高級ブティックなどが並んでいます。

ラストエンペラーの上海の人混みシーンのような、1920年代の雰囲気があった王府井通りにノスタルジーのある小生は多少がっかりしました。そんな話をすると、Luさんが大通りの枝道に案内してくれました。そこに、かつての王府井が残っていました。狭い道、ぶつかりそうになる人通り、狭い間口の店、積み上げられたみやげ物、呼び込みのおばさんなど15年前に通った王府井通りを思い起こしました。いま北京は急激に変革しています。表通りは近代化されてどこの国か分からなくなっていますが、一筋裏道に中国的なものを残してあるのは中国人の知恵でしょうか？ 車窓からオリンピックに向けて取り壊されている町並みを眺めてきました。紅樓夢や水滸伝で見られるような中国風の町並みが消えて行き、日本の渋谷や六本木のように変わっていくのは残念なことではあります。



雑多な品物が並ぶ大通りの裏道風景

王府井には老舗の茶店が数軒あり、その一つの「天福茗茶」でお茶やお菓子などの買い物をしたあと、王府井を後にしました。Luさんはこのあと郷里のハルピン市へ寄っていくそうで、びっくりするほど沢山、お土産を買っていました。小生がその昔、泊まっていた民族飯店や、よく日本食を食べに来ていた北京飯店（魚国という店でした）を車窓から追っているうちに、日が傾き、あたりが薄暗くなってきました。



シチズンの時計台



天福茗茶前

今回は北京市のダウンタウンを駆け抜ける具合で観察しましたが、市民の生活水準は向上し、とにかく女性が美しくなりました。服装もお化粧品も見違えるようです。

ただ、店のサービスは、天福茗茶のような高級店は別格ですが、普通のデパートやホテルの売店などは日本人から見ると全く雑な状況です。中国語でサービスは服務、店員は服務員といいますが、どう見てもサービスがいいとはいえません。この件は15年前とあまり進歩していないようです。生活習慣かもしれませんが、品物を投げるように渡すのはいただけませんね。

そうこうする内に、あたりは薄暗くなってきましたので、帰途に着くことにしました。



夕景の天安門



北京オリンピック会場

5. 徳衆全(北京ダック専門店)

北京といえば北京ダックですね。途中で徳衆全という北京ダックの老舗がアジア大会でできた新興街区に最大の店を出したということなので、帰路でもあり、夕食をとることにしました。案内してくれたLuさんへのお礼でもあります。タクシーの運転手は待たないで入れると聞いていましたが、金曜日のためか順番待ち。20組位のお客が店の前で待たされていました。30分位掛かるというので、近くにあったスーパーマーケットを見に行きました。戻ってみるとすでに呼ばれていて、また新しい番号で待たされることになりました。Luさんが頑張ってくれたので今度はそんなに待たないで席に案内されました。



有名な北京ダック料理店全衆徳入口



店内風景;列の角度ではコックの料理風景がガラス越しに見られます。

この店は安くておいしいというので有名で、小生はかつて前門にある本店に何度か行ったことがあります。現地の人が多く訪れる店はやはりコストパフォーマンスがよいので、安心できます。定食のようになっていて、いわば北京ダックセットに単品とドリンクをとりました。ガラス越しに北京ダックの料理風景が見られるようになっていて、大量生産の過程がよく分かります。ダックの脳を勧められましたが、年長者や身分の高い人が食す習慣なので、ありがたくいただきました。

(気がつくと、7ページになっていました。今回はここまでにして、後半は航天技研と航空博物館、及び長城と十三稜の見学記をまとめることにします。)

(次回に続く)